



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

# 遠藤周作研究：「歴史小説」を視座として

著者	長？ 拓磨
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028277">http://hdl.handle.net/10236/00028277</a>

氏 名	長 濱 拓 磨
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	乙文第134号 (文部科学省への報告番号乙第372号)
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与年月日	2016年6月15日
学 位 論 文 題 目	遠藤周作研究 —「歴史小説」を視座として—
論文審査委員	(主査) 教 授 細 川 正 義 (副査) 教 授 大 橋 毅 彦 山 根 道 公 (ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所教授)

## 論文内容の要旨

長濱拓磨氏は日本近代文学におけるキリスト教の受容という大きなテーマのもとに、これまで遠藤周作をはじめ、椎名麟三、堀辰雄、大岡昇平などを中心に多岐にわたって研究を進めてきているが、本論文は、なかでも特に力を注いできた遠藤周作文学について「歴史小説」の観点からまとめたものである。従来、遠藤文学は「純文学」と「軽小説」の二つに分けて論じられることが主流であったが、氏は遠藤が3歳から10歳までを中国大連で過ごし、帰国後も第二次世界大戦の渦中を体験し、戦後は「第三の新人」のメンバーとして戦後日本の抱える様々な問題と直面しながら過ごしてきたこと、また、1950年からのフランス留学体験によって一層明確にすることになった日本におけるキリスト教受容への問題意識から、16世紀後半からの日本における切支丹に対する問題にも関心も深め、切支丹大名の活躍や切支丹迫害の歴史へ注目を示してきたなど、様々な体験を通して〈歴史〉への関心を強く持っていたことが彼の創作活動に大きな影響を与えたという立場から、遠藤文学の全体を「歴史小説」を視座として捉えなおす視点で本論文をまとめている。

遠藤が具体的に「歴史小説」を手掛けて行くのは1966年の『沈黙』を契機とするが、長濱氏は初期の作品群を「歴史小説」への〈序章〉としてとらえ、「トボス」と「手記」の視点から考察し、遠藤の〈歴史〉観と〈小説〉観を明らかにし、遠藤文学を「歴史小説」の括りで全体を論じている。

所収論文は2007年5月発表の「『侍』論」から、本論文のために新たに執筆した「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(三)」等の4本まで、合計15本の論考であり、それを四部に構成して展開し、「結論」を加えて、まとめた論文である。

第一部は「「歴史小説」への序章—「トボス」をめぐる「手記」—」と題して、まず初期作品における「手記」と「トボス」の視点を明らかにし、次にその方向の提示がなされた作品として『黄色い人』と『海と毒薬』を取り上げている。まず「手記」については、遠藤の作品の多くが手記形式で書かれていること、或は書簡体、日記体形式なども用いられていることを指摘し、そうした手法を用いることで登場人物の中に潜む罪や悪がより深く見つめられることとなっているとしている。また「トボス」については遠藤文学にはフランス留学によって得た「悪」「テレーズ」「留学」という3つのトボスに加え「日常性」「弱者」「廃墟」というトボスを自覚しており、こうした多彩な作品空間に対する問題意識を通して遠藤文学はより深く人間の人生を見つめており、それによって生成された人間の〈劇〉を創作へ結び付けていったところに遠藤文学の根

幹が認められるとしている。

第二部から第四部にかけては本論の中心である「歴史小説」に対して、第二部「『切支丹物』の世界」、第三部「『評伝』の世界」、第四部「『歴史群像』の世界」として三期に分けて論じている。

第二部では、遠藤の「歴史小説」の第一期（一九五九年～一九六九年）に描かれた作品群を対象として論じている。第一章では遠藤の歴史小説に於いて重要な視点である「弱者」の形象について論じ、遠藤文学における「弱者」は、遠藤が体験した「第三の新人」との交流、「切支丹時代」の発見、ヘルツォーク神父の棄教という三つの出来事によって深められより明確なテーマとなったことを明らかにしている。第二章では遠藤文学に最も影響を与えたペドロ岐部について論じ、キリスト教の弾圧の中で激しい拷問に屈せず信仰をつらぬいたペドロ岐部を遠藤は「強者」の代表として捉え、遠藤は常にこの「強者」ペドロ岐部と対置させる形で「弱者」の問題をとらえており、『沈黙』も「強者」ペドロ岐部と対置させて主人公ロドリゴの「弱者」としての背教者から、真の「強者」として信仰に生き、信仰に殉じた人物として形象した作品であると論じている。

第三部は遠藤の「歴史小説」の第二期（一九七〇年～一九八〇年）の、『侍』を中心とした、海外に勇躍した日本人を主人公として「西洋と日本」「日本人とキリスト教」といったテーマを多く著した作品群を論じている。第一章では、遠藤がペドロ岐部をはじめて登場人物として描いた『メナム河の日本人』から山田長政を主人公にした『王国への道』までを取り上げ、「地上の王国」をめざした山田長政に対し「神の王国」をめざしたペドロ岐部を捉え、遠藤はペドロ岐部に受難のイエス像を重ね、そのペドロ岐部を基点にした形で弱者像を問い、真の闘う人の姿を描いていったという視点で論じている。第三部ではその視点の集約として『侍』における「侍」長谷倉六衛門像とベラスコ像を形象したと論じている。

第四部は遠藤の「歴史小説」の第三期（一九八〇年～一九九四年）の『女の一生』『王の挽歌』『女』を中心に「日本人とキリスト教」といった二項対立的視点から発展した、より複雑な人物相関を展開させ、時代の中で苦悩する人間像と「神のまなざし」を多く描いた作品群を論じている。ここでは特に『王の挽歌』に重点を置き、大友宗麟の「心の闇」が神へ向かう魂のドラマである点に着目し、宗麟の心の軌跡が見事に描かれ、キリシタン文学としての新局面が開かれていると評価している。

結論として、遠藤文学は「歴史小説」を視座として様々な面を見せる多面体構造をとっているのであるが、遠藤の視点は一貫してペドロ岐部が信仰の人生を貫いた「強者」としての生き方を基点にしたうえで、様々な状況における人物像を捉えており、そこに『王の挽歌』の大友宗麟像に神へ向かう真の強者としての魂のドラマを描いたようにキリシタン文学の可能性を拓いているとまとめている。

## 論文審査結果の要旨

本論文の主旨は、遠藤周作文学が従来、「軽小説」「純文学」の2つの枠組みを中心に論じられることが多かった研究の方法に対して、遠藤文学が特に後半期において「歴史小説」の比重がまし、初期からの文学テーマが「歴史小説」として集約されてきていると考えられる傾向を踏まえた上で、遠藤文学全体に対して「歴史小説」の枠組みを設定して全体を新たな評価軸で捉えなおしていくという点にある。その為に、まずフランス留学体験を踏まえて『アデンまで』『白い人』『黄色い人』『海と毒薬』という現代小説によって出発する初期作品群を、「歴史小説」への「序章」として位置づけ、それらの初期作品群の時期が、遠藤文学において「手記」形式の手法が確立され、多彩な作品世界を形成していくことになる作品空間としての様々な「トポス」が獲得されていく時期であったと位置づけている。

長濱氏は遠藤の留学を含む初期の体験から遠藤が作品創造の場として「悪」「テレーズ」「留学」「日常性」「弱者」「廃墟」等の「トポス」を認識するようになり、それを「手記」形式を多用することで、より深く見

つめ凝視していくことによって作家遠藤の〈魂〉への問いかけともなって、以後の遠藤文学、とりわけ「歴史小説」へと展開していくことになっていると捉えている。遠藤文学における「トポス」の明確化、「トポス」と対峙すべき作者遠藤の創作に向かう内的必然性への考察において課題は残っているが、初期作品から「歴史小説」生成の必然を分析する手法は効果的であり、遠藤の「歴史小説」の文学史的意義と必然を明確にする有効な方法となっている。

遠藤文学の「歴史小説」の意義を問う本論においては、長濱氏は遠藤の「歴史小説」を、遠藤文学の特徴である「弱者」の視点によって日本におけるキリスト教受容の問題を、キリスト教と日本の政治が最も厳しく対立した歴史に焦点を当てて、『沈黙』を中心とした、いわゆる「切支丹物」と分類される作品を多く書いた第一期と、『侍』を中心とした、海外に勇躍した日本人を主人公として「西洋と日本」「日本人とキリスト教」といったテーマを歴史と対峙させた「評伝」の手法で多く著した第二期、そして、『女の一生』『王の挽歌』『女』を中心として、「日本人とキリスト教」といった二項対立的視点から発展した、より複雑な人物相関を展開させ、それぞれの時代の中で苦悩する人間像、「神のまなざし」を多く描き「歴史群像」として捉えられる第三期と、三つに区切って論じている。そして、長濱氏は、三期を通して一貫して遠藤が最も注目してきた人物としてペトロ岐部を取り上げている。ペトロ岐部については、遠藤文学においてはじめて登場人物として描かれた『メナム河の日本人』を取り上げ、大分の国東半島で生まれ、有馬神学校で学ぶが、1614年に切支丹追放令が出た時、彼は海外に出て、「はやく神父となって帰国したい」という願望のもと、エルサレムからローマへと苦難の旅をしたが、この人物を遠藤が受難のイエスと重ねて捉えていることに注目している。そして、遠藤が『銃と十字架』において、ペトロ岐部が「日本に戻って神の国をそこに築こうとした」のに対して、同じころに「地上の王国」を築くことを求めて日本をとびだしアユタヤでリゴールの藩主となり、「地上の王国」を築く直前に身内の裏切りで毒を盛られた山田長政と比較している所にも注目して、遠藤が、最後は日本に戻り拷問の末殉教を遂げたペトロ岐部が最後まで「強者」として全うした姿に最も関心を寄せ、それが遠藤の描く『沈黙』のロドリゴ、『侍』の長谷倉、『王の挽歌』の相伴宗麟などに深く反映されていることを検証し、いったんは踏絵を踏み棄教していったロドリゴや、帰国した時は、任務のために形だけ洗礼を受けたが信仰は持っていないと主張していた長谷倉、長らく苦しんだ「心の闇」を最後に告白して神へ向かう相伴宗麟の心の軌跡など、遠藤がペトロ岐部に深く共鳴する視点において、遠藤の歴史小説の登場人物たちが、真の「強者」として、過酷な歴史の中で最後は神の前に対峙し救われていく魂のドラマを描いているところに遠藤の「歴史小説」の意義が認められるとまとめている。ペトロ岐部に着目しての考察は新鮮な遠藤研究として評価できるが、一方、「弱者」の立場に深く関心を持ち、「強者」であるペトロ岐部のような殉教の人生は歩めなかった日本人の「弱者」としての人間の苦悩を見据えた人物像を多く捉えた遠藤文学においては、「強者」と「弱者」の狭間で苦闘する人間のドラマをさらに深く剔抉していくことで、長濱氏が最後に「神と人間との狭間に苦悩する」「人間の姿」を描くところに遠藤文学の意義があるとしているまとめに対してもより明確性とリアリティを持った考察となる事ができたと考えられる。

本論の特徴は、長濱氏の資料と歴史に対する入念な調査・検証にあると言える。遠藤が上智大学のH・チースリク教授に直接指示を受けたことは知られているが、長濱氏はH・チースリクの『キリシタン人物の研究』などの著作、「切支丹勉強の師」と仰ぐ松田毅一のような著作等あらゆる資料を丹念に探り遠藤の歴史小説の背景と必然を鮮明にしている点は高く評価できる。そしてこうした歴史的事実を検証したうえで本論の論拠としている「手記」と「トポス」への視点にも強く反映させた氏の考察は、作品の背景にある歴史と状況に対してこれまでの遠藤研究で看過されてきたものに対しても綿密に分析し作品の必然性を明確にして、「歴史」と「小説」の溝を埋め、よりリアルに遠藤の「歴史小説」の文学史的意義を解明することとなっている。

以上の点において、2016年5月23日（月）に、主査副査も参加しての公開発表会を行い、その後、主査副査の3名で、口頭試問を行ったが、長濱拓磨氏の論文が博士学位（文学）を授与するに値するものと評価したので、ここに報告する。